

学習会 (子ども会) だより 9月号 後編
MY SKY 第10号
マイ スカイ

1995年9月26日火曜日発行(毎月第2・第4土曜後の火曜日定期発行)

発行者

板野中学校

学習会

編集・文責:吉成正士

つい先日^{せんじつ}、久しぶりに自転車に乗ってみました。秋晴れ^{あきば}のさわやかな空気を裂いて走^きてみたくなっただです。

日頃車に乗っているせいか、今まで見えなかったものが見えてきたような気がしました。そして公園内を走っていたとき、周囲にある草木^{くさき}を見てこんなことを感じました。

「今年の夏も暑くって雨もほとんど降らなかったけど、木って枯れないんだなあ。たくましいもんだなあ。けどもしかすると、暑くて雨が降らなかったり、寒くて地面^{こお}が凍ったりするほど、草木は根を広く深く張り巡^{めぐ}らすのかな。周りの環^{かん}境^{きょう}が厳^{きび}しければ厳^{きび}しいほど、その環境で生きていくため、目に見えないところで、しっかりと根を張るのかな。

その逆^{ぎやく}に、ぬくぬくとした環境で育った草木は、それだけでやっていけるから、大きくてしっかりと根を張っていないのかなあ。だから、ちょっとした厳^{てんこう}しい天候でも枯れてしまうのかなあ。

自分も、もっともっと大きな根を張り巡^{めぐ}らしたいもんだなあ。」

車もいいですが、いつもいつも車ではいけないのかもしれない。自転車で走るのも、自分で歩いたり走ったりするのも、たまにはいいものですね。それぞれのスピードに合わせて、見えてくるものがあります。そんなものを大切にしたいですね。

ちなみに、ある電動^{でんどう}車椅子^{くるまいす}に乗っている身体^{しんたい}「障^{しょう}害^{がい}」者が、こんなことを言いました。「日本では、電動^{でんどう}車椅子^{くるまいす}のスピードに制限^{せいげん}がある。1度でいいから、みんなが走っているスピードで、歩道^{ほどう}を走ってみたい……。」



◎風々吹^{かぜかぜ}くな しゃぼん玉^{だま} とぼそ^{たなかしげる} (田中蔚^{きようし}著「教師の生き方と同和教育」より)

「MY SKY」製作^{せいさくちゆう}中に、タイトルになっているこの歌がテレビから流れてきました。

田中蔚^{たなかしげる}先生がこの歌についてふれた文が「教師の生き方と同和教育」に載^のっています。

その文^{ぶん}章^{しょう}を抜粋^{ばっすい}しますので、少し読んでみてください。

……ある日の広報^{こうほう}より

3月号を読んで、あるおばあさんが手紙をくださった。

『……少しずつ^{あたた}暖^{まい}かくなって参りました。突然^{とつぜん}のおたよりでびっくりなさると
 と思いますが、今朝^{けさ}は何となくあなたさまに^{たよ}便りが書きたくなって……。

私は^{とうねん}当年八十五歳、お陰様^{かげさま}で元気です。実は毎月初めの新聞にはさみこまれる
 広報^{こうほう}を楽しみにしています。今朝も「隣保館^{りんぽかん}から」を先ず読ませてもらいました。
 心^{こころ}して読まずにはいられません。

.....

象さん象さん

しゃぼん玉

一 象さん象さん

一 しゃぼん玉 とんだ

お鼻が長いのね

屋根まで とんだ

そうよ

屋根まで とんで

母さんも長いのよ

こわれて 消えた

二 象さん象さん

風々吹くな しゃぼん玉 とぼそ

だ一れが好きなの

二 しゃぼん玉 消えた

あのね

とばずに 消えた

母さんが好きなのよ

生まれて すぐに

こわれて 消えた

風々吹くな しゃぼん玉 とぼそ

.....

子供の時、習^{なら}った歌^{うた}を懐^{なつ}かしく口ずさみ、思わずノートしてしまいました……』

手紙^{てがみ}をもらったわたしはうれしくて、早速^{さつそく}お礼^{れい}の手紙^{てがみ}に歌の好きそうなおばあ
 さんに「象さん」「しゃぼん玉」「ここはお国^{なんひゃくり}を何百里」などの歌への思^そいを添
 えてお送りした。「象さんお鼻が長いのね、おかしいね」「そうよ、長いでしょ
 う。でもちっともおかしくない。この鼻^{はな}で食物^{たべもの}を口^{はこ}へ運んだり、重い物を持ち上
 げるし、体^{からだ}を洗^{あら}ったりできるんよ。わたしの大好きな母さんだって長いのよ」と
 自分の鼻^{はな}に誇^{ほこ}りを持ち、その長い鼻を持つ母さん^{はこ}に誇^{ほこ}りを持っている。人間も同
 じ。肌^{はだ}の色や言葉^{ことば}、風俗^{ふうぞく}・習慣^{じゅく}は違^{ちが}っても、それぞれに誇^{ほこ}りを持ち、認め合っ
 ていきたい。

作詞者^{さくしや}のまどみちお氏は訴^{うった}えている。

同じころに生きた島崎藤村^{しまざきとうそん}が貧乏^{びんぼう}のどん底^{そこ}で明治三十九年、「破戒^{はかい}」を出版^{しゅつぱん}
 したが、その前後^{ぜんご}に長女のみどり、次いで生まれてわずか一歳の縫子、次女の孝

子を相次いで亡くしている。「しゃぼん玉」の一番はその悲しみを雨情がねぎら
った歌、二番は野口雨情が一歳の娘を亡くし、娘を虹色のしゃぼん玉にたとえ
その悲しみと昇天への祈りを込めて歌ったという。

歌というものは、飲びや悲しみの叫びなのだと思う。……………

私たちは無意識の中で仕事の途中や道を歩きながら鼻歌を口ずさむ。ふと気づいて
なぜ私はこの歌を口ずさんでいるのかと思わずハッと自分自身に気づく。上の広報の
中に出てくる「しゃぼん玉」もその一つである。

無意識に歌っているうちに日航機の墜落事故で亡くなった娘への思いが募る。
「屋根までとんで／こわれて消えた」の歌詞が、青春の希望に燃えて、結婚という
屋根にさしかかったとたん壊れて消えた娘になってしまうのである。花嫁衣装を着せ
て「天国へお嫁入りするんだよ」と葬ってやった娘、どうぞ虹色に輝くしゃぼん玉
のように天へ舞いあがれ、「風々吹くな」と歌うのである。歌詞の二番目「とばずに
消えた」までいくと、尾翼をもぎとられて、糸の切れた凧のように三十分の恐怖の中
をさ迷って御巢鷹山頂に「こわれて消えた」情景が偲ばれて、思わずふつつり歌を
やめてしまう。

「そうさん、そうさん」や「しゃぼん玉」にこめられた作者の感性、それを私たちは
きちんとかんがえて口ずさみたい。すなおに、まっすぐにもものを見つめ、とぎすまされ
た感性こそが自他を大切にしていける原点なのである。人間いかに生くべきかを問い
かけていく原点なのである。

「しゃぼん玉」はわが子に先だたれた親の悲しみを歌ったものである。人の死ほど
悲しいものはない。それにひきかえ、人の生、誕生は何人にとってもこの上もなく
嬉しいものである。しかし、そのわが子の誕生を嘆いたのが次の詩である。

生命へ・いのち

松 江 ちづみ

お前が、この世に生をうけたとき

嬉しいと思えなかった

お前の命が、私の身体に宿ったのを知ったとき

何日も何日も一人で泣いた

それどころか

お前が^{まえ}この世^よの光^{ひか}りを浴^あびるまえに
 殺^{ころ}してしまおうとまで思った
 こんな母^{はは}を許^{ゆる}しておくれ
 人^{ひと}は「おめでとう」と言^いってくれるだろう
 しかし私は、お前^{まえ}を産^うむのをためらった
 私は冷^{つめ}たい視^し線^{せん}や冷^{つめ}たい言葉^{ことば}の中で
 冷^{つめ}たい矢^やを全^{ぜん}身^{しん}に受^うけて生^なきていた
 お前^{まえ}も私^{わたし}と同じ思^{おも}いをするのだろう

できることなら お前^{まえ}に代^かわって
 この母^{はは}が
 その重^{おも}い荷^に物^{もつ}を背^せ負^おってやり^やりたい
 お前^{まえ}に向^{むか}けられた冷^{つめ}たい矢^やを
 この身^みで受^うけてやり^やりたい
 いま お前^{まえ}は何^{なに}も知^しらずに乳^{ちち}をのむ
 その生^{いのち}命^{めい}を その全^{ぜん}身^{しん}を私^{わたし}にゆだねて
 私^{わたし}の腕^{うで}の中^{なか}で
 ギクン、ギクンと喉^{のど}をならして
 私^{わたし}の温^{ぬく}もりが お前^{まえ}に伝^{つた}わる
 お前^{まえ}がだ^だきくな^なったとき この母^{はは}の思^{おも}いを
 語^{かた}る日^ひがくるだろう

「お前^{まえ}がだ^だきくな^なった時^{とき}、この母^{はは}の思^{おも}いを語^{かた}る日^ひがくるだろう」と、福岡^{ふくおか}の保^ほ育^{いく}所^{しょ}の
 保^ほ母^ぼさん、松^{まつ}江^えちづみさん^{なげ}は嘆^{なげ}く、「お前^{まえ}がだ^だきくな^なった時^{とき}、この母^{はは}の思^{おも}いを語^{かた}るこ
 とはないだろう」と書^かいて欲^ほしいのだが……。

田^た中^{なか} 蔚^{しげる} プロフィール

1923年生^{ひようご}まれ 兵^み庫^き県^{けん}三^{さん}木^き市^し教^{きょう}育^{いく}委^い員^{ぎん}会^{かい}同^{どう}和^わ教^{きょう}育^{いく}指^し導^{どう}室^{しつ}長^{ちやう}、三^{さん}木^き市^し立^{りつ}別^{べつ}所^{しょ}小^{しょう}学^{がく}校^{こう}
 長^へを^へ経^へて、三^{さん}木^き市^し綜^{そう}合^{ごう}隣^{りん}保^ぼ館^{かん}長^{ちやう}。十^{じゅう}年^{ねん}前^{ぜん}におきた日^{にっ}航^{こう}機^き墜^{つい}落^{らく}事^じ故^こで最^{さい}愛^{あい}の長^{ちやう}女^{にょ}「愛^{あい}子^こ」
 さん^なを亡^なくす。その時^{とき}に出^い版^{ばん}さ^なれた「おすたかれくい^{しゅっぱん}えむ」に掲^{けい}載^{さい}さ^なれた「娘^{むすめ}の遺^の
 こし^いてく^いれたもの」は特^{とく}に有^{いう}名^{めい}で、十^{じゅう}年^{ねん}過^かぎた今^{いま}も、多^{おほく}くの人^{ひと}々^々の胸^{むね}を打^うち続^{つづ}ける。
 わが子^こへ^への思^{おも}いを抱^{いだ}きつ^つつ、今^{いま}もな^なお同^{どう}和^わ教^{きょう}育^{いく}の最^{さい}前^{ぜん}線^{せん}で日^{にっ}本^{ぽん}全^{ぜん}国^{こく}を駆^かけめぐる。

今^{いま}年^{ねん}に入^いってすぐ「娘^{むすめ}の遺^のしてく^いれたもの」にふれて、私^{わたし}は一^{いっ}つ^つの文^{ぶん}章^{しょう}をし^したためてい
 ます。「娘^{むすめ}の遺^のしてく^いれたもの」に続^{つづ}いて、その文^{ぶん}章^{しょう}を紹^{しょう}介^{かい}し^したいと思^{おも}います。

娘^{むすめ}の遺^のしてく^いれたもの

田^た中^{なか} 蔚^{しげる}

花^{はな}嫁^{よめ}の衣^い装^{しょう}を着^きせて

茶^{ちや}毘^びにふせし

遺^い骨^{こつ}を抱^{いだ}きて

など微^ほ笑^{ほえ}める

1985年8月12日、娘が日航機墜落事故で遭難した。娘は体育の教師をしていた。
 御巣鷹山の山奥で傷があれば自分で止血し、夜露を飲んででも必ず生きているにちがいない。そう信じて現地へ駆けつけた。事故は凄惨を極め想像を絶していた。バラバラ遺体の中を気が狂ったように捜し求めてわが子にやっと巡り会えたのは7日目であつた。

「どんなに変わり果てた姿であろうと、せめて一晩わが家の畳の上に寝かせてから葬ってやりたい。」という妻を説いて遠い高崎の地で茶毘にふした。来春の結婚に夢みたであろうウェディングドレスを着せ、好きだったテニスのボールを左手に握らせて……。

一条の煙と共に白骨と化したその遺骨を抱きしめた時、とめどなく流れる涙と共に「よう帰ってきたのう。」と思わずほほえんだ私。

一緒に同道した婚約者の姿がいじらしかつた。彼はこの事故の一か月ほど前に「愛子さんとの結婚を認めてください。」とわが家を訪れた。「うちは同和地区ですよ。」「愛子さんから聞いています。両親がお盆にお願いに来るはずですよ。」これが彼と交わした最初の会話であつた。

そして、奇しくも遺体収容の藤岡市の体育館で両家の親が対面した。私が部落問題に触れた時、お父さんは「私は教師です。少なくとも人さまに平等を説く人間として自分を偽るようなことはようしません。」といわれた。私は返す言葉もなかった。

娘の縁談を聞いた時「それでも親戚の中には反対の人がいるかも」とか「娘が先々思い悩むのでは」と、あれやこれやと思い過ごしていた自分が恥ずかしかった。こんなお父さんや彼だからこそ「私部落の生まれなんよ。」と重い言葉を打ち明けることができたのだろう。「これからも息子をお宅の家族の一員に加えてお付き合いさせてください。」とお父さんはおっしゃった。

お盆休みの休暇が切れ、いくら勤めても彼は職場に帰ろうとしなかった。疲れはてた妻の肩をもみ、私に濡れタオルを絞り、買物や電話の応対や遺体の確認に奔走した。

四十九日がすんでから、彼は半畳分もある大きな娘の肖像画を持って来た。娘の面影が鮮やかに描かれていた。「仕事の合間に毎晩絵筆をとる間だけが心休まる時なんです。愛子さんに会いたくなればこの絵を見に来ます。」と。四十九日の一つの区切り思いを断ち切らせたいと願った私だったのだが。

11月の連休には彼は泊まりがけでやって来た。生まれて初めての稲刈りや脱穀を

手伝ってくれた。「これで来年^{たう}田植えをすれば、僕もひとかどのお百姓さんになれますかね。」とも言った。あれから数カ月、やがてその田植期がやってくる。

遺体が見つかるまでの一週間、娘が神戸^{こうべ}を^た発つ時の服装や持ち物、歯形などの^{じょう}情報^{ほう}を持って数人の友達^{はんしん}が^わ阪神^{はんしん}や^か和歌山^{わかやま}から駆けつけてくれた。いずれも大学時代やその後のスポーツ仲間だった。葬式^{そうしき}がすんでからも四国や岡山から友達が訪ねてくる。友情とは何なのか。ひとかどに愛の道を人に^と説いてきた私に^は果たしてそれが出来るのか。愛とは人に^と説くことではなく^{おこな}行^{おこな}うことなのだ。それを私は教えられた。

人の命には限りがある

だから自分の思うように生きたい

人は軽く、十年先、二十年先を口にするけれど

その時を大切にしなければ

今、光っていたい

娘の絶筆である。「今、光っていたい」の思いを^{のこ}遺^{かえ}して娘は還らぬ人となってしまった。朝夕^{あさゆふ}仏壇^{ぶつだん}に^{がっしょう}合掌^{がっしょう}するたびに、^{とな}唱^{とな}えるべきお^{きょう}経^{きょう}を知らない私はこの^{うた}詩^{うた}を口ずさむ。いつの間にかフシのつくようになった詩を口ずさみながら、私は^{すいへいしやせんげん}水平社宣言^{すいへいしやせんげん}のさいごにある「人の世に熱あれ、人間に光あれ」の^{さいこうまんきち}西光万吉^{さいこうまんきち}の言葉とが重なり合って、今日も……。

人を愛し愛さる人に

育てよと

名づけし「愛子」

空に^ち散^ちり^ゆ逝^ゆく

※

実はこの前^{ぜんしゅう}週^{しゅう}、私の^{いとこ}従兄弟^{ながねん}が^{にゅういん}長年^{にゅういん}の入^{すえ}院^{たかい}生活^{しんがく}の末^{すえ}、他^た界^{かい}した。29年の人生だった。そのお葬式^{さんれつ}に参列^{さんれつ}させていただいたが、その時の^{おじ}叔父^{ひょうじょう}の表^{のうり}情^やが、私の脳裏^{のうり}に焼^やき付^けいて離^{はな}れなかつた。^{ひつぎ}棺^{くわん}にふたをし、^{くぎ}釘^{くぎ}をさしていく……。最後に^{なごり}名残^お惜^おしそうに我が息子の^{なきがら}亡骸^{みずか}を見つめ、^{とびら}自ら^とその^{おじ}扉^{おじ}を閉^おじていく叔父……。

^{おじ}叔父^{おじ}は私の父にそっくりである。^{おじ}叔父^{おじ}は^{かそうば}火葬場^{かそうば}へ行^いったときも、入れられていく^{ひつぎ}棺^{ひつぎ}を最後まで見つめていた。じつとじつと見つめていた。とうとう最後の^{しゅんかん}瞬^{しゅんかん}間^{かん}、^{とびら}扉^{とびら}が係員に閉じられようとしているとき、^{おじ}叔父^{おじ}は思いを振り払^おうかのように天^{あお}を仰^{あお}いだ。なんとも言えない^{おえつ}嗚咽^{おえつ}が私^{おそ}を襲^{おそ}った。「私が^い逝^いくときも、あのように父は私を

見るんだろうか……。』そう思うと、たまらない思いが私の胸をしめつけた。そんな父の姿、表情、思いを想像しただけで、どうしようもない思いがこみ上げてきた。

人にはそれぞれの人生があり、^{じゆみょう}寿命がある。だからこそ、その人生を懸命に生き抜かなければならないし、生きたい。全てに全力を^つ尽くす。^{なにごと}何事にも一生懸命。^{きのう}昨日の自分より今日の自分が好き。今日の自分より明日の自分が好き。そんな生き方をし続けたい。2年E組のみんなにも、やはりそんな生き方をしてほしい。決して自分に^{あま}甘えない。^{あた}与えられる^{きび}厳しさではなく、常に自分自身に^{きび}厳しさを求めて生きる生き方をしてほしい。

そしてまた、自分もそういう生き方を貫^{つらぬ}いていきたい。 拙著「いしづえ」

上の文章にあるように、今年の初めに私の従兄弟が亡くなりました。そして、つい先日の9月18日には、叔父が亡くなりました。阪神大震災でも親戚の者が他界しています。ここ最近、人の死に直面する機会が多いのですが、その度に「しっかり生きねば」と感じます。「亡くなった人のため」とか「亡くなった人の分も」というのではなく、「自分のできる中での精一杯で生きていきたい」と、本当に思うのです。

私たちのしている同和教育を「部落の人のための」とか「部落の人だけの」教育と思ひ込んでいる人がまだまだいるようです。凄く残念なことです。私たちは、同和教育を引っ提げて、真の人間解放を目指し、人間教育に取り組もうとしているのです。本当に「民が主となる社会」を実現するため、部落問題をテコにして考えているのです。

私たちは同和教育を考える中で、「生命」について考え、「生命」の大切さを知り、その「生命」が守られていない現実に対して怒りを感じ、「生命」を守っていこうと行動にうつしていくところまで進まねばなりません。

人の命には限りがあります。誰も必ず死を迎えます。その限りある瞬間の中で、私たちはどういう生き方をしていくべきなのでしょう。人は何のために生きるのでしょうか。そのことを常に考えながら、人は成長していくべきだと思うのです。

さてみなさん、みなさんは何のために生きているのでしょうか？



かくじっけんさいかい
◎フランス核実験再開

タイミングが多少ずれたのですが、タイトルのことについて少しかだけふれておきたいと
 思います。

ところで、タイトルになっている言葉を見聞きしたことがありますか？

この度フランスが、太平洋のど真ん中で統治しているムルロア環礁で、地下核実験を再開しました。合計で10回ほど予定しているそうです。実際には7回に減らすそうですが、それでも核実験をすることに変わりはありません。いったい核実験をして、何に利用するのでしょうか？たとえ地下であっても、核によって汚染されることに変わりはないのではないのでしょうか？

今週から2年生が修学旅行に出発しますが、そこでまた、核兵器のもたらす結果を目のあたりにすることになると思います。もし今回の核実験が、核兵器研究のためのものならば（そうなのですが）、絶対に許してはなりません。もう「ヒロシマ・ナガサキ」をつくってはいけません。私たち日本国民は、もっともっと声を大にして訴えなければならないのではないのでしょうか。被爆体験について世界に訴えるのは、やはり日本だと思うのです。もし何かのしがらみでそれができないのならば、そのしがらみをも考え直そうではありませんか。

まだまだ世界は、力のある国が「支配する側の論理」で動いています。このままでは、人権を中心に据えた真の民主主義はあり得ません。これからは私たちが、新しい世界を、新しい日本を創造するのです。同和教育を引っ提げて、新しい社会を創造していくのです。平和問題も部落問題も考える根っこは同じです。そして、誰もが心豊かにすごしていける社会にしていきませんか。

核実験によせて、二つ文章が届けられました。紹介しておきます。

核実験がムルロアというところでされました。あんなきれいな海に落とすなんて、本当に腹が立ちます。それまで何にもできなかった私たちが情けないです。1 C女子

※

今日原爆の実験が行われたらしい。日本には2回も原爆が落とされて、何万人の人が死んだ。原爆が落とされた国に生まれたから、真剣になるのかもしれないけど、信じられない。あの恐ろしさを知っているはずなのに。確かフランスがこの実験したんだよねえ。もしフランスにこの原爆が落ちていたとすれば、こんなこと考えてたかなあ。中国もずっと前したけど、中国にも原爆落ちてたら、あんなことしたかなあ。日本は、自分たちがつらいめにあったから、もう2度とあんなことしないって決める。日本に原爆が落ちたのは、日本にも悪いところがあると思うから、そんなに責められない（落とした国を）。これって、自分の立場になって考えてみれば、しなかつ

たのかな。これも部落問題学習につながるのかな？ところで、どうしてこんな実験するの？何が目的なのかなあ？ 2B女子

—吉成からの提案—フランスや中国だけを責めていては解決しない！アメリカをはじめ、核兵器を持っている国は他にもある！だから「全ての核兵器廃絶」これを提案したい！



◇◇◇ これからの日程 ◇◇◇

さて、板中祭も天候不順の中、何とか大成功のうちに終わりました。今は次なる行事に向かって、各学年ごとに取り組んでいる最中だと思います。

1年生は、あさつての全体学習での資料『自分以下を求める心』に全力を傾けているでしょうし、来月には宿泊訓練もありますね。

3年生は、来月5日の全体学習に向けて『水平社宣言』についての学習を繰り返していることと思います。連日の厳しい受験勉強も大変ですね。ごくろうさます。

そして、2年生には修学旅行もありますが、いよいよ来月17日に第2回板野中学校同和教育研究大会を迎えることとなります。もうすぐ、資料『私の目をみて！』にとりかかっていくと思いますよ。昨年の全同教徳島大会前日全体学習を第1回としていることから考えると、今年も多くの方が参加があるものと考えられます。全学年が入っての全体学習なので、学年を問わず、学習を深めておきましょうね。

また学習会の方でも、これらの全体学習を控え、部落問題学習を中心にした学習が繰り返されていきます。よお〜く日程表を見ておいて、日頃来れていない友達とも誘い合わせ、より多くの仲間で資料についての知識や思いを深めておきましょう！！



★9月28日(木) 1年B組1年全体学習「自分以下を求める心」

★10月5日(木) 3年B組3年全体学習「水平社宣言」

★10月17日(火) 2年B組全校全体学習(第2回板野中学校同和教育研究大会)「私の目をみて！」

★10月31日(火) 板野郡同和教育研究大会(上板中学校)



◎卒業したら何するん？(目的をもった進路決定のすすめ)

本当は今回の「MY SKY」は3枚にしたかったのですが、今回も無理でした。ごめんなさい。1枚増えたのを良いことに、23日のことをレポートしておきたいと思います。

「N L A (ニューライフ・アドベンチャー) 高校生の主張」というのを知っていますか? 毎年全国各地で県大会や地方大会が行われ、その代表者が全国大会に出場し、その模様はラジオやテレビで放送されるのですが、今年の県大会発表者5名のうち、板中出身者が2名もいたのです。その内の一人が県代表として四国大会に出場することが決まりました。すごいものですね。



自分の体験や思い出を発表する高校生たち

全国高校生の 主張県大会

企画から運営まですべて高校生が行い、自らの体験やメッセージを発表する「ニューライフ・アドベンチャー」

チャーター第十八回全国高校生の主張(同実行委など主催、毎日新聞社など後援)の県大会が二十三日、徳島市の県郷土文化会館で開かれ、徳島商二年、大前友紀さん(二)が県代表に選ばれた。応募者八十九人の中から予選を経て県大会に出場したのは、大前さんを含め、協町高三年、住友理沙さん(二)▽富岡西高三年、前川卓也さん(二)▽板野高三年、大森和幸さん(二)▽富岡東高羽ノ浦分校二年、大地薫さん(二)の計五人。

約二百五十人を前に「親友に出会って」「学歴社会について」「だれも振り向かない」「背が高くて」などのテーマで、自分の胸の内や思いを話した。大前さ

手話活動体験談を発表

県代表に大前さん(徳島商2年)

んは「手話と出会って」と題し、手話活動を通して得た貴重な体験を発表した。大前さんは全国大会を目指す。指し、十月二十九日に高松市のオリーブホールで開かれる四国地区大会に出場する。

二人とも板中生だった頃は、全体学習でも頑張っていた子でした。そんな先輩たちが高校に行ってもいろんな分野で頑張っているというのは嬉しいものです。その活躍が人の注目を集めるものであったとしても、なかったとしてもね。同和教育が人間をまっすぐに伸ばしてくれてるんだと思います。そんな進路決定を、みなさんも考えてください。「みんなが行くから」というものではなく、「これがしたいから!」という進路決定にしてください。

それを考えるのは「今」からですよ!

今大会の放送・発表: 10月23日(月)JRTラジオ22:00~22:30、徳島新聞